

1.6. ウィーン便り (6)—— 番外編：南極大陸はウィーンより暖かかった (2001.12) ——

日立事業所燃料サイクル部 小西俊雄

2000年12月、アルゼンチンのブエノスアイレスで公務があった。初の南米訪問で公務後の楽しみに何を計画しようかと考えた。現地は夏である。最初に考えたのは例によって趣味の「山」だった。「南半球最高峰アコンカグア 6960m」に魅かれた。山岳協会で資料を調べ、登頂経験者に話も聞いた。まだ酸素ボンベが必要な高度ではないと言われたが、20 kg近くの荷を担いでこの高度への十日間を越える登山に耐える体力の自信は持てず結局断念した。代わりに浮上したのが南極大陸への船旅だった。



* 出発まで

インターネットで集めた情報はすべて英国発で、乗る船はどれもロシア船籍の砕氷船。長期クルーズもあったが私は一番短い十日間にした。南半球の夏とはいっても南極大陸は寒いに違いない、高度の問題はないとしても気温の点ではアコンカグアよりも厳しいかも知れない、山用の防寒具で充分だろうか、と期待・好奇心・不安が同居していた。が、旅行会社からの資料によると零下十度以下になることは珍しいという。この寒さなら持ちあわせの防寒具で不安はなかった。本船の中はTシャツで過ごせるほど暖かいらしい。南極大陸に上陸するための短時間のためではあるが、防寒具を一杯詰め込んで出発した。



旅行会社から届いた資料の中に南極大陸の地図もあった。地球を下から、つまり南極上空から見たものである。概ね円形に近い大陸の一部に子猫の尻尾のような半島がある。この半島が人の住む地、アルゼンチン南端からもっとも近いらしい。船は片道二日あまりでこの地域に到達し、天候状態を見て数ヶ所で上陸するとある。ペンギン他の野生動物にも会えるらしい。「南極圏」は南緯 66 度 33 分以南を指す。夏至に白夜、冬至に陽を見ない緯度だ。訪ねる南極半島はこの緯度を跨いでいる。近辺に点在するいくつかの小さな島にも上陸するようだ。各国の観測基地も点在している。日本の昭和基地はこの半島から東へ約 4000 kmの地点にある。(南極大陸はオーストラリアよりも広い)

十二月十日、公務を終えてブエノスアイレスから「最南端の街」ウシュアイアに飛んだ。夕方五時すぎ着地。南緯 54 度 50 分、北半球なら樺太北端に相当する。厳しい環境を予想していたが思ったよりずっとマイルドだ。気温 14 度。日差しはやさしい。周囲の山は低いが雪を冠っている。

* 乗船、出帆

十二月十一日 (月)

朝食前、小散歩に出る。ホテルは街とは離れた「景勝」の海沿い。すでに陽は高い。海鳥が飛び交い、これからの十日間の船旅を想像する。アルゼンチン南部のパタゴニア地方にも氷河はあるし、ペンギン他の極地動物もかなりいるらしい。南極大陸はさらにエクサイティングだろうと胸が躍る。

朝食後、荷を預けて街へ出る。乗船予定の Dranitsyn 号(10000 トン)の黒い船体が港の最先端に投錨している。

乗船午後四時。パスポートを乗員に預ける。幸い個室。午後六時出帆。同時に船内設備や日程説明に続いて安全訓練。総勢約六十名。意外に年配の客が多い。日本人は四名。八時、歓迎パーティ。



十二月十二日(火)

船の揺れで目覚める。三時。窓の外はもうかなりの明るさだが曇り。陸影も当然ない。波高いドレーク海峡をひたすら走っている。もう一眠りして五時半起きだす。二日間は「走るのみ」なので、船内の図書室で大陸探険や科学調査の歴史を調べたり、甲板から海を眺めたり、最上階の運転室を訪ねたりしてのんびり過ごす。空き時間に南極に関するガイドの講義が続く：食物連鎖。鳥。ペンギン、雪と氷。

昼過ぎ『急病人発生、全速でウシュアイアに引き返す。今後の予定は夕刻相談』と船内放送。客の一人がデッキで転倒、ヒップ骨折。至急医者に届ける要あるもこの波ではヘリ装備が使えぬ由。

午後九時半。『波の静かなビーグル海峡で病人を救急ヘリに移送完了、再び南下する。』

急病人騒ぎで乱れたが、船内生活のパターンが見えた：6時早起き鳥コーヒー、8時朝食、9時午前プログラム（上陸または講義）、12時半昼食、14時午後プログラム、19時今日の総括と明日の予定、19時半夕食、21時映画。食事は思ったより美味しい。ドイツ人のシェフらしい。

十二月十三日(水)

揺れで目覚める。5時。窓の外は曇り。再南下からまもなく10時間、昨日より南下している。ひたすら走っている。波が高くなってきた。窓外を飛沫が飛ぶ。昨日より揺れは大きい。外気4度。10000トンの船でこの揺れ、初期の探検家は風を頼りの小さな帆船でどんな揺れに耐えたのか想像を絶する。

船内の蔵書で「探検家スコット」を読み直す。子供の頃、彼の伝記に感動した。アムンゼンに南極点一番乗りで負けたこと、帰途に隊員全員が遭難死したことなどを思い出す。彼の探検目的は「科学調査」が第一だったこと、荷物搬送にロバを用いたことが犬橇主体のアムンゼンに負けた一因であることなど新しいことも知った。合間に講義：南極の地質。鯨。探検史。

午後6時。『明朝大陸に接近、午後上陸に備え待機せよ』と放送。地理上の「南極圏」は夏に白夜を迎える地域線なのに対して、「南極コンバージェンス」は生態的により意味のある地域線（帯）である。南極からの冷海水が北からの温海水の下に潜り込んで海表面の温度分布に段差が生じ、そこに棲息する動物の種類に大きな違いが見られると言う。夏である今、この線は北に移動し、南緯六十度で今日ほぼ横断したという。生態学的には「南極圏」に入ったことになる。

*いよいよ南極大陸へ

十二月十四日(木)

4時前起床。晴れ。波静か。今日はアムンゼンの極点到達（1911年）記念日。くしくもこちらは初の上陸予定日。気持ちが高揚する。制御室へ急行するが、まだ鳥影も冰山も見えない。

六時は早起き鳥タイム。図書室兼用の喫茶ルームで紅茶を飲んでいると中年婦人が「海鳥が見えるのか」と眼を輝かせて飛び込んで来た。「予定表に早起き鳥プログラムと書いてあった」と居合わせたスタッフに迫る。微笑ましい誤解。言葉の間違いは日本人だけではないと安心する。

朝食時、冰山に近づく。周回を航行する。でかい。十階相当のこの船も見劣りする。冰山は陸上の氷河

が自重で下流に押し出され、海岸で崩壊した破片が漂流しているもの。氷河の流下速度は毎年 300m と言う。山型や平らな長屋型など自然の造形美に富んでいる。大きいものは海底に座礁しているが、中小型は何年も漂流すると言う。氷山にも年輪があることを知る。周回中に数頭の鯨が出迎えてくれた。多くの乗客が甲板でウォッチング。11 時頃投錨。ウシュアイア出航から 65 時間経っている。

(漂流する冰山)



昼食後、最初にペンギン島(南緯 62 度 06 分,西経 57 度 56 分)上陸。ゴムボートに乗り換えて海岸へ。外気零°Cで寒くはない。水も案外暖かい。氷の塊かと思っていた南極だが、海岸の土面は露出し、湿原に近い苔類も見える。「案外、緑っぱいな」が第一印象。海岸には不自然に大型の骨が散在している。その昔の捕鯨時代の名残だそうだ。多くのペンギン¹が出迎える。あざらし²も数頭寝そべっている。日光浴か。海鳥³が飛び交う。夕食は「初上陸」の感激と印象交換で大変な賑やかさ。明日も上陸計画が続くと全員が興奮気味である。

十二月十五日(金)

5 時。曇り。窓外に雪を冠る島。運転室へ登ると、右に島、左に大陸半島が見える。ついに来た。しばし見入る。外気-2°C、風速 7m。進路に氷塊が増える。が、砕氷船だから心配はない。

午前、クバビル島(南緯 64 度 41 分)上陸。無風。ジェントウペンギンが興味深そうに寄ってくる。ボートで沖の冰山を周回する。氷河から剥がれた氷山の断面を間近に見る。荒々しく氷の絶壁がそそり立っている。海面の小船から見上げると高層ビル並だ。こんな怪物に衝突すればタイタニックもたまらなかつただろう氷の結晶で光線が屈折して生ずる青が神秘的だ。

昼食の間に船は湾内を南下し南極半島西岸のネコ港(南緯 64 度 51 分)に移動。大陸へ向かうボートの途中で鯨



の群れに会う。頭か尾か、黒いものが水面上にちらっと見えた、と私には思えた。すかさずガイドが「オキゴンドウ鯨の家族連れ、おそらく 4 頭」と言う。数隻のボート間で携帯が働き、鯨を探し回る。乗客も

¹ 鳥類だが飛べない。海中から餌を採る。今が繁殖期。通常二卵だが、育つのは大きい二つ目だけ。鶏卵よりやや大きい。寿命は約 20~30 年、種類によっては 50 年も。雄は海岸に巣を作って雌を待つ。雌は立派な巣を持つ雄を選ぶ。背黒腹白の体が保護色効果を持ち、海に浮かんで身を隠す。今日見た三種はどれも小型で身長は皆約 50cm で目の周辺の特徴で識別できる。南極に生息するのは十七種ペンギン中の七種。最大の皇帝ペンギンは夏の南極には居ない由。

² 哺乳類。今日のは象あざらしで体長約 2m。体を寄せ合って多少警戒心を抱いている様子。

³ 何種類かいる。多いのはあほう鳥とスキュア。このスキュアはペンギンの周辺でその卵を狙っている。



ネコ港海岸にはジェントウペンギンの群生地コロニーがひろがる。小春日和の様な陽気だ。海岸で泳ぐペンギンを観察する。飛ぶように水面をジャンプして呼吸する。また潜る。早いものだ。あの小さい体で数分間も潜水できるなんて、どんな肺活量なのか。

(ネコ港の Gentoo ペンギン)

夕食に「南極」銘柄のビール。明日の英国基地から「現地発」郵便が出せると聞いてカードの下書き。

十二月十六日(土)

3時過ぎ「あまりの静けさ」で目覚める。連日「揺れ」で目覚めていたから「あまりの静けさ」に逆に不安になる。運転室の乗員に尋ねると、「まだドリフト中、間もなく出発」と言う。外気3℃。小雪。

9時。アルゼンチンの越冬基地 Almirante Brown に上陸。「極点まで2800 km」の標識が建つ。数棟の建物は皆閉っている。10人程度の越冬隊規模か。半年の越冬生活はどんなものかと想像する。今日は先ず裏山



(70m)に登山。雪山の感触を楽しむ。わずかな距離だが雪道を登ると汗ばむほどだ。見下ろすパラダイス湾は無機質の美しさだ。海が黒い。(写真七、Almirante Brown 基地上方から望むパラダイス湾)

ボートツアーで冰山剥離直前直後の造形美を満喫する。崩れ落ちた後の氷河の断面には大きなクレバスが横顔を見せている。これに気付かずに氷上を駆けて

来て横断しようとしたスコットの犬橇隊は先頭から次々とクレバスの中に飛び込んで犬を死なせ、輸送力を失ったのが遭難の一因だったと本に書いてあった。本船帰還のころから雪風強まる。

午後の英国基地上陸は雪混じり強風(秒速27m)と荒波で中止と決定。乗客の間にため息。昨夜準備した南極現地発カード、旅券に期待した「南極大陸訪問」のスタンプも実現しなかった。

(氷河断面に見えるクレバス、上部の幅約5m)



午後 7 時。『天候回復見込み薄。さらなる上陸断念し、南極圏到達を目指す。砕氷航行もあり得る。三日余り外洋航行が続く。荒波覚悟。船酔い対策要。』と明日の予定。結局上陸は四度。期待したほど野生動物に会えたのか。が、南極圏到達も記念、と気持ちを入れ替える。他の乗客も同じ思いのようだ。

十二月十七日(日)

深夜「揺れ」で目覚める。外洋に出たのだ。寝ておれない。検診時のバリウム台を思い出す。そのベッドが不規則に予告なしに動いているようだ。体が上下にベッドの上で移動する。外は明るい。

4 時。うとうとしたが起きて制御室へ上がる。雪風は小康状態だが波が高い。傾斜は目測 30 度を越えている。ビデオに「横揺れ」を撮る。最大傾斜 42 度と後刻知らされる。南極圏まであと 1400 km。

8 時。荒波で朝食が出せない。外気一度。結局朝食は抜き。

9 時。『天候さらに悪化の見通し、計画打切りウシュアイアへ直行する』と放送。客の間に落胆のため息。到着最南点は南緯 65 度 50 分、アイスランド北端に相当することを地図で確認。南極圏まで 40 秒、距離にして約 700 km だが、触先はすでに北を向いている。南極圏到達もなくプログラム完了。結局上陸は島二度、大陸二度。さらに期待が続いていただけに、突然の「北転」に失望感隠せず。

が、得たものも多い。探検の歴史に新しい事実を知った、山とは違う自然の美しさも見た、食物連鎖など南氷洋の生態系についても学んだ。自然を守り、人類の共有財産として維持しようと「南極条約」の目指す目標も知った。そして個人的には「北」にも興味が湧いてきた。「南」は遠いけど、「北」なら近い。日本からでもかなり行けるのではないか。ヨーロッパからは北緯 80 度のスピッツベルゲン島まで行けるかも知れない。そこも新しい世界だろう。ますます好奇心がエネルギーを与えてくれそうだ。

*帰路へ

十二月十八日(月)

ひたすら北上。「南極大陸上陸証明書」が交付される。帰ってからの「記録」の準備に時間を割く。「揺れ」で難しいもの：体操、睡眠、シャワー、書き物。旅行記はやはり日英独の三編を書くのだろう。

十二月十九日(火)

久しぶりに碧い空と青い海。南の海は黒かった。午後 3 時、ホーン岬をかすめてウシュアイア港へ。

十二月二十日(水)

早朝 4 時、ウシュアイア港接岸。戻ってきた。未明の闇に橙色の街の灯が美しい。久しぶりに「揺れない」甲板で体操。見下ろすと、船上と栈橋上でロープ懸けに忙しく働いている。

8 時、下船開始。「こんなに遠くまで来られて、良い思い出の世紀末になった」と感慨にふける。スーパーで仕入れたビールとつまみを持って昼は街の裏山に登る。暑くはない夏の陽射しの中で海を見下ろしてピクニック。犬を連れて近所の子供たちが「オーラ！」と近づいてくる。

十二月二十一日(木)

帰路に発つ日の朝の海岸、珍しく私に詩心が湧いた。「こんな朝日を一緒に見たい」

十二月二十二日(木)

丸一日かけて戻ったウィーンは南極大陸より寒かった。零下 5℃。風が耳を切るように冷たい。

「こんな朝日を一緒に見たい」

窓の外のほの明るさに目が覚める

朝の五時

対岸の山の稜線に橙色の空が始まろうとしている

朝日が今にも顔を出しそうだ

涼気の中で味わいたい

顔も洗わず素手で飛び出す

冷気に広がる海岸砂浜、黒い海面

海鳥だけが砂浜を歩く、浜沿いを泳ぐ

キーッ↑ キーッ↑ グワッ↓ グワッ↓

寄せては帰す波音が伴奏する

ザーッ↑ サササ↓ ザーッ↑ サササ↓

稜線から橙色の太陽が顔を出す

水面に映る橙色の線が海をふたつに分断する

黒い水面をその橙色の線が自分に向かって走る
光線が強調するのか、押し寄せる波面が大きく見える

空を横切る海鳥二羽、雁か

いや群れではないからアルバトロスカ

逆光の中で黒いシルエットが空を飛ぶ

波打ち際の砂利浜を歩く

口に自然に出てくる「知床岬」

三度繰り返す

朝日が稜線を離れていく

海を分ける橙色の線が次第に太くなる

丸い橙色の太陽

朝日が高くなっていく

一旦小さくなった太陽が大きく眩しく直視できなくなる

水面の橙色の線が次第に細くなり

やがて大きな太陽が海に映るだけとなる

体が冷えてくる

ホテルに戻る自分の影が長い

こんな朝日を一緒に見たい

